

教育フィールド研究Ⅶ シラバス

【授業内容】

人間が生きていくために欠かせないのが「食」であり、いのちの糧「食」の大切さを子どもたちに伝えていくことは、教員の大きな役割である。また、生産現場では、どんな人たちがどんな思いを持ち、どんな風に生きているのか？そのことを知っておくことは、将来教員になる者にとっては大変大事であり、必要なことである。

しかしこれまで大自然と対峙した食を生み出す現場での実習はなかなか実現できなかった。本講義は、酪農生活体験を軸とした2泊3日の生産現場での「酪農家民泊体験実習」を行い、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに「食」や「命」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有していく。

【授業の目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」を通じて、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、「食」や「命」等に関する意識や考えを深め、教員として子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有する。また、抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ、「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育について検討する。

【到達目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」に参加することで、「食」や「命」等に関する意識や考えを深めることができる。

実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、他者とも議論、意見を共有しながら教員として子どもたちに伝えるための手法を検討することができる。

抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育のあり方を検討していくための基礎的視野を養うことができる。

お問い合わせ先

〒085-8580 北海道釧路市城山1丁目15番55号 北海道教育大学釧路校(担当:准教授 宮前 耕史)

TEL: 0154-44-3238 FAX: 0154-44-3218

平成31年3月発行

いのち・食・生きるに触れる 酪農家民泊体験実習 2018

〈教育フィールド研究Ⅶ〉
実施報告



北海道教育大学釧路校

酪農家民泊体験実習

いのち・食・生きるに触れる 2泊3日のプログラム



【酪農家民泊体験】

酪農家での農村ホームステイで
いのち・つながり・家族に触れ、
生きることを体感



【振り返り・講義】

ホームステイを振り返り、
また講義からそれぞれが感じたことを
ワークシートに記入



【議論・まとめ】

それぞれが感じたことをシェア。
いのち・食・生きるを軸に
みんなで議論

食の話題にあふれる現代社会。教師が子どもたちに伝えられるコト。
いのちの糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために
～教師を目指す学生のための酪農家民泊体験実習～

子どもたちに何をどう伝えるのか？
体験をどう活かしていけるのか？

将来教師になった時に必要な力を育む

現在、学校においても様々な食育の取り組みが行われている。
これをさらに充実発展させるためには日々子どもと向き合う教師自身こそが「食」とこれ
を生み出す第一次産業、そして農山漁村の価値を「体験」を通じて身をもって実感し、考え、
他者に伝える力を身につけていることが必要である。

このような力量を備えた教師を育成することは食糧生産基地北海道、とりわけ我が国有数の
農業地帯に囲まれた道東に位置する北海道教育大学釧路校の使命である。

※ 教育フィールド研究VII プロジェクトの概要より抜粋

北海道教育大学釧路校では、根室地区農協青年部連絡協議会及び株式会社ノースプロダクションの全面協力のもと、希望する学生に1泊2日の農村ホームステイを提供しています。

ホームステイは、根室地区農協青年部連絡協議会所属の酪農家宅で行っています。その後体験を振り返るワークショップを行って「食」についての意識や考えを深め、将来、
自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに「食の大切さ」等を伝えるための手段を検討し、議論・共有していきます。



平成 30 年度 酪農家民泊体験実習 実施報告

STEP 1

農村ホームステイ

酪農家宅で1泊2日の
ありのままの生活体験

1日目、大学を出発したバスは一路、根室管内へ。まず、牛の生態や酪農の仕事について酪農家さんから講義を受け、牛や酪農の基本を学びました。

その後 12 戸の受け入れ先の酪農家さんと対面。入村式を行った後、それぞれの家庭に散らばり、給餌・牛舎掃除や搾乳・哺乳といった1泊2日の農村ホームステイ、酪農生活体験がスタートしました。ふだん何気なく飲んでいる牛乳が、どんな場所でどんな人たちによって、そしてどんな想いの中で生み出されているのか？

酪農家さんのお宅での様々な作業体験のみならず、受入家庭での温かいふれあいなどからたくさんの学びと気づきがありました。いのちの糧「食」が生み出される現場での実体験は、命と向き合い、「生きる」を考える大きなきっかけとなりました。

翌2日目のホームステイ終了後は、JA 根室地区女性協議会の協力で調理実習を行いました。

STEP 2

振り返り・発表準備

生活体験を振り返り、
共有する

2日目の午後は、根室管内標津町にある研修施設に移動。ワークシートに記入して、一人ひとりが自身の体験を振り返りました。その後グループワークを行って、ホームステイの感想や気づきを共有しました。

夕方には、「いのち」「食」「生きる」をテーマに、酪農家さんと本実習のコーディネーターである近江正隆氏に講話をいただきました。

3日目の午前中はグループワークの内容を参加学生全体で共有した上で、発表資料の作成等、受け入れ農家さんに向けた発表会の準備を行いました。

STEP 3

発表・講義

いのち・食・生きるを
考える

3日目には受け入れ酪農家さんをお招きし、農村ホームステイを通じた学びの成果を発表。お昼は受け入れ酪農家さんとバーベキューをしながら交流し、体験を通して感じたことを語り合いました。

1泊2日の短い時間でしたが、想いを共有した酪農家さんと学生が、思わず涙する場面もありました。学生たちは、「いのちの糧・食」とそれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を実感すると同時に、「つながり」や「つながりへの感謝」も感じているようでした。

STEP 4

コンセプトマップ

体験前後の知識の変化を
可視化して実感

事前研修会と実習 2 日目に、それぞれ「牛と自分の関係」を図式で表すコンセプトマップを作成しました。

自分の書いた事前・事後の2つのコンセプトマップを見比べ、農業に関わる「知識」の増加や「知識構造」の変化など、体験前後の自身の変化を実感しました。

平成 30 年度 酪農家民泊体験実習の概要

実施日：平成 30 年 5 月 25 日～5 月 27 日

実施地：根室管内

参加者：教育フィールド研究Ⅶ選択学生・院生 24 名

5/25

8:45 出発式・大学出発

11:15 酪農に関する勉強会

12:10 入村式・酪農家さんとの対面

12:30 農村ホームステイ開始（搾乳・牛舎掃除・給餌体験など）

5/26

11:45 農村ホームステイ終了

12:00 調理体験実習

15:00 講義①（グループワーク・講話）

20:00 夕食

5/27

7:00 起床・朝食

8:30 講義②（発表資料作成）

11:30 振り返り発表会

13:00 バーベキュー交流会

14:00 退村式

17:00 大学到着・解散



これまでに参加してきた学生の感想



中山 みなえ 〈なかやま みなえ〉 2016年度受講

長沼町出身。現在、浦幌町立浦幌中学校3年生副担任。（担当教科 英語）

実習するまでは酪農が遠い存在でしたが、私たちにとって酪農は決して無縁ではないこと、人との繋がりの大切さを強く感じました。この経験を活かし、酪農や人との繋がりの大切さを子どもたちに伝えたいと考えています。

例えば、食育担当の栄養教諭と連携し、授業で酪農家や乳業メーカーで働く方をお呼びして、生産者の思いを伝える機会を作ったり、牛乳の生産過程を英語で説明する学習を通して、食の大切さや職業について子どもたちに考えてほしいです。もし教師が酪農に興味を持っていないければ、このような機会が失われてしまうと思います。

百聞は一見にしかず。たった一泊の民泊でしたが、一度の経験から多くのことを学びました。実際に目で見て確かめたことを話す方が、より多くのことを子どもたちに伝えることができます。実際に行かないと分からない学びが沢山あります。酪農体験に参加し、多くの人に出会うことで、自分と向き合うきっかけにしてほしいと思います。

濱野 友香 〈はまの ゆか〉 2016年度受講

中札内村出身。現在、中札内村立中札内小学校1年生特別支援担当。

私にとって、酪農体験は貴重な体験でした。酪農家さんの言葉一つひとつから、命の重さや、それを私たちは日々いただいていることを知り、自分の無知さを知ることができました。知っているつもりと、実際に体験して知るとでは、こんなに違うのかと、驚いたことを今でも覚えています。また、みんなで学びの振り返りをしたこともいい思い出です。振り返りを通して、学びが明確になり、牛や食に関する見方が変わりました。

これから私は、教師として、学んだことや感じたことを、食育の観点から子どもたちに伝えていきたいと強く感じています。例えば、給食の時間に今まで牛乳を飲めなかった子どもが、食育を通じて、牛乳を飲むことができ、「牛乳が美味しい！」と感じてもらえればいいなと思っています。もし、行こうかどうか迷っている方がいれば、行ってみてください！きっと、未来につながる素敵な経験になると思います。



年代 恵香 〈ねんだい あやか〉 2015年度受講

釧路町出身。現在、大樹町立大樹小学校4年生付特別支援担任。

今年度は大樹小学校の4年生と共に「大樹町の自然」について、総合的な学習の時間に学びました。その中で、「鮭の食育授業」があり、地元の漁師さんや漁協組合の方々から、鮭が大きく育つまでを習ったり、鮭をさばき、その場で調理したりする体験をしました。子どもたちは、大樹町内を流れる歴舟川で、産卵のためにかえってくる鮭を普段から目にしています。ですが、実際に鮭をさばき、さばいたばかりの鮭を食べるということはとても大きな衝撃がありました。事前に学級では、絵本『いのちをいただく』を読み聞かせし、

生きていくことは何か、食べるとは何かを考えました。そうすることで、「いただきます」という言葉の意味をしっかりと考えることができるようになりました。

酪農体験学習は、体験してみなければわからない命の尊さについて、学びを深めることができるとてもいい機会です。ぜひ参加してみてください。そして、同じ職場で自分の体験を子どもたちに一緒に伝えられることを願っています。

酪農家民泊体験実習コーディネーターからのメッセージ

現在、この国の全労働者人口における一次産業従事者の割合は、わずか4%。100人中4名。つまり25人に1人が農林漁業に従事しているという計算だ。興味を持ちぼくが生まれた時代(48年前)を調べてみた。その割合は20%。つまり5人に1人。そしてぼくの親が生まれた時(80年前)は、なんと48%。つまり仕事に就いている人のほぼ2人に1人が農林漁業に従事していたことになる。

きっと昔は、多くの国民が家族や親戚の中に農林漁業者がいたんだと思う。つまり農林漁業・農山漁村が自分事として捉えることが可能な身近な存在だった。でも人口が首都圏・大阪や名古屋などの大都会に集中し、世代が次々変わるごとに自分事に考えられる立場の人たちは少なくなり、いまのような状態になってしまった。きっとこの割合はまだ減少しかねない…。

生きていくために欠かせないものがある。どんなに強くなっても、どんなに賢くなっても、どんなに偉くなっても、水や空気、そして食べ物がなければぼくらは生きていけない。そしてそれは、農山漁村で育まれている。農山漁村はそこに住む人たちだけに留まらない社会全体として大切な場所。でも残念ながら、大切な場所だと思えることをイメージできるような身近な存在でなくなってしまっていることが、様々な社会のねじれを生む要因をつくり、社会不安を作っている大きな原因ではないだろうか？だから取返してしなければならないこと。それは国民みんなが農山漁村を身近に感じ、自分たちの家族が住むようなイメージを持ち、愛着をもって自分事として感じてもらうようになるための仕組みづくりだと思ふ。そのための有効的な手段が「農村ホームステイ」であり、仕組みづくりに向けては、農と学びの更なる連携が不可欠だと感じている。



株式会社ノースプロダクション 代表取締役

近江 正隆 〈おうみ まさたか〉

1970年東京生まれ。19歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・林業・漁業を経験。現在企画会社ノースプロダクション代表取締役、また十勝管内で農村ホームステイを推進するNPO法人食の絆を育む会理事長、北海道地域づくりアドバイザーなどを務める。また、著書「だから僕は船をおりた」(講談社)がある。

参加学生の感想

遠藤千咲 〈えんどう ちさ〉

北海道網走市出身。
北海道教育大学 釧路校 地域文化研究室 3年

「北海道＝酪農！」というくらい北海道のイメージが強い酪農だけど、私は今回体験してみて、自分が思っていた以上に酪農を知らないということに気づいた。せっかく北海道に住んでいるのにもったいないと思ったし、きっと自分が気付いていない魅力がまだまだあると思いワクワクした。将来、北海道で教員になるにあたり、北海道の魅力をたくさん知って教材にしたいと思う。そのためにはやはり体験が一番だと思う。

兼松寛行 〈かねまつ ひろゆき〉

兵庫県出身。
北海道教育大学 釧路校 特別支援教育研究室 3年

自分が将来子どもに何かを教える立場になったら、命の大切さ、食の大切さを教えていきたいと思う。酪農家民泊体験を通じて、漠然と「食べ物を大切にしましょう」というだけではなく、大切にしなければならない背景や自分の体験を子どもたちに話すことができるようになった。酪農家さんの仕事、そして家畜が一生懸命に生きた結果として人間の暮らしが豊かになっていることをしっかりと伝え、命の大切さを分かってもらえるようにしたい。